

フィニッシュタイム変換システムとは

東京大学大学院 工学系研究科
池上 孝則

■ ■ ■ はじめに ■ ■ ■

「マラソンの記録が定量的に比較ができるようになる！」なんて、誰が想像したでしょうか。フェアタイムはこんな夢物語を実現しました。

異なる条件下で開催されるマラソンの記録を仮想測定系システム(Virtual Measurement System:VMS)で規格化することにより、誰もが簡単に、正確に、そして定量的にマラソンのパフォーマンスを把握できるようになったのです。

そして今日、VMSは更なる進化を遂げました。各地のマラソン大会の記録(グロスタイム)を他の大会の記録に変換する「フィニッシュタイム変換システム」の誕生です。

世界に例のない夢のシステムの全容を以下に説明いたします。

「これからフィニッシュタイム変換システムについてお話します。ちょっと長くなるかもしれないけど、マコちゃん、よろしく。」

「よろしくお願いま〜す。」

■ ■ ■ フィニッシュタイム変換システムができること ■ ■ ■

最初に、フィニッシュタイム変換システムによって何ができるのかをお話しましょう。

(1) 国内大会のフィニッシュタイムの相互変換

まず、日本国内のマラソン大会の記録(グロスタイム)を他の国内大会の記録として変換できます。

マラソン大会には高速コースもあればタフなコースもあります。また天候に恵まれた大会もあれば、暑かったり風がきつかったりと厳しい条件下で開催された大会もあります。

フィニッシュタイム変換システムは、どのような条件下で開催されたマラソンの記録であっても、瞬時に他の大会の記録として変換することができます。



「本当ですか？」

「本当です。」

「スゴ〜い！！ こんなことができるのって、神様だけですよね。」

「そうですね。でも、ひょっとしたら神様にもできないかもしれませんよ。神様も忙しいですからねえ(笑)。」

(2) 国内大会と国際大会の相互変換

先にお話した国内大会に加えて、2004年以降のオリンピック3大会(アテネ、北京、ロンドン)及び世界選手権5大会(ヘルシンキ、大阪、ベルリン、大邱、モスクワ)の計8大会も変換可能です。つまり、国内大会64大会と世界大会8大会、および世界大会相互の相互変換ができます。

たとえば、アテネ五輪女子マラソン優勝の野口みずき選手に各地の大会でゲストランナーのように走ってもらうといったことができます。しかも、最高の状態に仕上げた体で真剣勝負の走りをしてもらえます。

また逆に、皆さんが北京五輪に出場して、サムエル・ワンジル選手やジャウアド・ガリブ選手などの世界最高峰の選手とともに暑熱下の超過酷なレースに挑むこともできます。

「スゴ過ぎ！ 誰しものがオリンピックや世界選手権といった夢の舞台に立つことができるということよね。」

「そうです。世界大会が今よりもずっと身近に感じられるようになるでしょうね。」

(3) 相互変換できる大会の数およびフィニッシャーの数

なお、フィニッシュタイム変換システムの対象となる大会はWebサイト“ハートフルランナーズ”でフェアタイムが掲載されている64大会(2014年10月現在)です。

このWebサイトでは、基本的に各大会について直近の3大会のフェアタイムを公開しています。したがって、大会数の累計では約200大会、フィニッシャーの累計では約100万人です。

なお、Webサイト“ハートフルランナーズ”のURLは <http://www.heartful-runners.co.jp> です。

“ハートフルランナーズ”または“フェアタイム”のキーワードで検索してみてください。

■ ■ ■ フィニッシュタイム変換システムがもたらす効果 ■ ■ ■

次に、フィニッシュタイム変換システムがもたらす効果について、ランナーとマラソン大会の両面から考えてみましょう。

(1) 楽しさ100倍 … “ワープタイム“

「マコちゃん、SFに出てくる“ワープ“って聞いたことありますか？」

「ありますよ。宇宙戦艦ヤマトとかスタートレックに出てくる、宇宙をビューンって旅するあれでしょ。」

ワープは、「宇宙空間歪曲航法」なんて呼ばれてますが、要するに空間をワープ(歪曲)させることにより近道して移動する航法のようなのです。地球のお隣の火星に行くだけでも早くても6月もかかるそうですから、大宇宙を

航海するとなるとこういう手段が必要ですね。

フィニッシュタイム変換システムは、まさにワープです。なぜなら、フィニッシュタイムの変換という手続により、遠く離れている大会をあたかも走ったかのように疑似体験できるわけですから。

「そう言われればそうですね。」

「こうしたSFの世界との類似性から、フィニッシュタイム変換システムで変換される時間を“ワープタイム(warp time)”と命名しました。」

「ワープタイム？何だか楽しそう！」

「楽しいですよ。たった一回、マラソンを完走しただけで100近いマラソン大会にワープし、そのマラソンを完走した気分を味わうことができるんですから。」

「じゃあ、楽しさも100倍ね。」

「そう、まさに楽しさ100倍。」

「しかも、ワープ航法は空間的移動に過ぎませんが、フィニッシュタイム変換システムの“ワープ”は時間すら超えちゃいます。去年の沖縄でも3年前の北海道でも、そして2005年のヘルシンキでも2004年のアテネでも行けちゃいます。」

「“4次元のどこでもドア”って感じね。」

「それぞれ、センスあるなあ。それこそドラえもんの上に行く、“時空を超えるどこでもドア”ですね。」

(2)全てのランナーのパフォーマンスが向上！

ワープタイムは楽しいだけじゃないです。ランナーにとっていいことがいっぱいあります。ここでは、ワープタイムがランナーのパフォーマンスの向上に寄与するという話をしましょう。

「その前に、ちょっと横道にそれますが、自然災害の話をしてします。」

「自然災害、ですか？」

日本における代表的な自然災害は台風と地震。でも両者には大きな違いがあります。

台風は、観測技術の進歩により、進路や強さ、被害の状況までかなりの精度で予測することができます。ところが地震は、現在の技術では予知することはできません。

これらの自然災害に対して、予備知識の差によって被害に大きな差が生じます。

「それはそうですね。阪神淡路大震災でも、東日本大震災でも、突然に発生したから大災害になったのよね。」

「もし予知できていたら、亡くなった方を激減させることができたでしょうね。」

「ところで、台風や地震とマラソンとどういう関係があるんですか？」

「予備知識の有無という観点で見れば、よく似ているのです。マラソンも、自然災害と同様、予備知識の差によって結果に大きな差が生じるのです。」

「そうかも知れないけど、今一つピンときません。」

「じゃあ、別な話をしましょう。」

「マコちゃん、“敵を知り、己を知れば、百戦殆うからず”って聞いたことがありますよね。」

「あります。孫子の兵法に出てくる有名な一節ですよ。」

「流石！この教えはマラソンにもピッタリあてはまります。」

「あ、これならなんとなく分かる気がします。」

「ところで、市民マラソンでの勝敗って、なんででしょう。」

「そうですねえ、う～ん、難しいけど、こういうことかしら。」

「どういうことですか？」

「上位の選手以外は人との勝ち負けにはほとんど拘っていないので、“いいレースができれば勝ちで、潰れちゃったら負け”ということですかね。」

「そうそう。市民ランナーだとそういうことでしょうね。」

「だから、先の孫子の一節を市民マラソンに当てはめたとすると、“敵、すなわち出場する大会のことをよく知り、己、すなわち自分の状態をよく知っていれば、いいレースができますよ”、と言っていると解釈できますね。」

「そうですね、きっと。」

「そこで、レースに勝つ為に、出場する大会に関することも、自分の力や状態についてもよく知りたいのですが、実はマラソンは、そのどちらを知ることもとても難しい競技なのです。」

「そうなんですか？」

「そうなんです。」

たとえば北海道マラソンなどの暑熱環境下のレースに参加した場合や、高低差の激しいタフなコースの大会に出場すると、ゴール地点では「冬のレースとは20分は違うよね」とか「このアップダウンで10分位のロスかな」といった会話が聞かれます。



「そうそう、厳しい条件でのレースだと記録が悪いので、つついそんな話しちゃいますね。」

また、オリンピックや世界選手権は夏場に開催される大会なので、世界記録と比較するとどうしても記録的には見劣りがする為でしょうか、世界最高峰の選手が集う大会であるにもかかわらず適正な評価が行われているとは言えません。

こうした事例は、各ランナーのパフォーマンスや各大会のレースコンディションを評価することが如何に難しいことであるのか、その評価は勘や経験に頼らざるを得ないということを如実に示しています。

「北京オリンピックのワンジル選手の記録って、スゴイ記録なんですよ。」

「あのレースは人類史上、最高のレースです。フェアタイムでは世界記録の評価ですよ。」

「そんなことも分かるんですか？」

「分かります。世界大会のフェアタイムも先のWebで公開していますので後でみて下さいね。」

我々がランナーのパフォーマンスを評価する場合、どうしても記録や順位などの見かけの情報に頼らざるを得ません。

それでも、こうした見かけの情報では推し量れない領域に関しては、勘や経験を駆使してその裏にある真実を探ろうとしますが、人の勘や経験は個人差が大きいので、同じランナーのパフォーマンスであっても人によって大きく評価が異なってきます。

「確かに難しいのは事実よね。」

ここで朗報。従来のフェアタイムによる評価に加えて、ワープタイムを用いて立体的にパフォーマンスを把握できるようになりました。全てのランナーが、より真実に近い情報を簡単に入手できるようになったのです。

まず、現在および過去の大会のフェアタイムによる検証により、また他のランナーとのフェアタイムによる比較により、自分自身の状態を正確に把握することができます。

フェアタイムを用いることにより、従来の不正確で個人差が大きい勘や経験による評価から、信頼性の高い定量的な評価ができるようになります。

他人の評価に戸惑われることなく冷静に自分を見つめることができるようになるばかりでなく、他人に対しても先入観なくフェアな評価ができるようになります。

「フェアタイムって、ランナーにとって強い味方よね。」

「そう、フェアタイムは全てのランナーの“えこひいきなしの評価”ですからね。」

次に、大会本番のことを考えてみましょう。

私自身も、自分の実力や各大会の特殊性を考えもせず、ただただ記録への思いだけで突っ込んで潰れるレースを何度も経験しています。

こんな結末で終わった大会では、何の達成感もありません。

マラソンを生涯スポーツとして位置づける場合ならなおさら、明らかに失敗と総括できるレース、次につながらないレースは避けたいものです。

こんな皆さんに強い味方が登場！

前述のフェアタイムに加えて、これからはワープタイムが使えるようになります。

ワープタイムにより、全てのランナーは”予想されるフィニッシュタイム“という形で全ての大会の過去3年に亘る情報を入手できるようになります。

スタート前にワープタイムがランナーの頭に予備知識として入っていれば、当日の天気などを考慮しながら目標タイムやペース配分を的確に設定し、余裕をもって走り切るイメージをより緻密に描くことができるでしょう。

その結果、未知の大会であっても慣れ親しんだ大会のように冷静にレースを運ぶことができ、高い満足度をもってレースを終えることができるでしょう。

つまり、フェアタイムとワープタイムの活用により、全てのランナーのパフォーマンスが向上するはずです。

「孫子の兵法の話に戻りますが、“ワープタイムで敵を知り、フェアタイムで己を知れば、百戦殆うからず”ということになるのです。」

「そう繋がるのね。」

「分かってくれました？」

「よ〜く分かりました。」

ちょっと硬い表現ですが、“ワープタイムとフェアタイムはランナーの知的進化をもたらす”と言ってもいいでしょう。

私は、こうした知性を“クール”と表現しています。そして”知的進化を遂げたランナーの皆さんを“クールランナーズ”と呼んでいます。

冷静沈着な思考をする人たちであることから、“クールランナーズは新しい世界を切り拓く人たち”でもあると思っています。

(3) マラソン大会の共存共栄に寄与する！

シドニー五輪の金メダリストでマラソン6連覇中だった高橋尚子選手のアテネ五輪代表落選のニュースは国民を二分する議論を湧き起こしました。この事例に限らず、かつてのマラソン五輪代表選考は怨念にまみれた骨肉の争いの歴史でもありました。

「あの事件は私もショックだったわ。なんとかならなかったのかしら。」

「当時はフェアタイムがなかったかですらね。もしあったら問題なく選ばれたでしょうね。」

“公平な選考をするには一発勝負しかない”と力説する有識者も多数おられましたが、フェアタイムの登場はこうした“有識者の常識”をもエレガントに破壊しました。

”一発選考でなくても公平な選考ができる”ということが証明され、“数多くの大会が代表選考大会として開催できる”という“共存共栄”の道を切り拓かれたことは、大会関係者にとっても、オリンピックを目指す選手にとって大きな福音でしょう。

つまり、フェアタイムは“マラソン大会の共存共栄”という課題に対して一つの解を提示したと言えるのではないのでしょうか。

「オリンピックや世界選手権の代表選考を兼ねた大会ということになれば、大会の盛り上がりが変わるでしょうね。」

「そう。TVの視聴率、スポンサー収入、沿道の観客数などが全く違ってきますよね。」

「フェアタイムやワープタイムを使うことで皆がハッピーになれるということね。」

「そうです。できない理想を語るのではなく、できる現実を示したということです。」

「なんかちょっとカッコいい！ 尊敬しちゃいそう！！」

「なんのその、愛の園。」

別の視点での共存共栄の問題を考えてみましょう。

国政レベルでは東京一極集中が大きな課題の一つですが、マラソンも都市型マラソン大会と地方の大会との二局化があるように感じられます。

都市型マラソンでは、募集開始からネットがフリーズし、あっという間に定員に達するという状況が頻発しています。

「私もエントリーできなかったことが何度もあります。」

「だから、抽選制に移行する大会も増えていますね。」

「抽選の大会ってエントリーは楽だけど、当落が不明なのでランナーにとってはスケジュールを立てづらいのよね。」

その一方で、参加者の伸び悩む大会が少なくありません。各大会でいろんな工夫をされていますが、交通のアクセスや宿泊設備等のインフラでハンデのあるマラソン大会が継続的に安定した運営することは容易なことではないでしょう。

フィニッシュタイム変換システムは、特に地方の出場者が伸び悩む大会にとって大きな効果があると思っています。

「どうして？」

「出場者が増える為には、リピーターに加えて、毎年毎年、初参加の人が一定数、いないといけませんね。」

「それはそうよね。」

「ワーptimeは、初参加の人の増加に効果があるのです。」

「そうなんですか？」

「そうなんです。」

なぜなら、たった一度だけマラソン完走しただけのランナーであっても、全国各地の大会のワーptimeを知ることができます。

そうすれば、制限時間内で完走できるかどうかも分かりますし、目標とするタイムも見えてきます。そして、自然に大会の光景、走っている姿が浮かんできます。

つまり、ワーptimeがランナーのマインドにおいて各地の大会に関する興味を刺激し、その結果、全国各地の大会の出場者の増加に寄与するであろうと考えています。

「そういうことってあるかも。」

「ワーptimeという予備知識によって不安が払拭されますから、初参加の敷居が下がるということですね。」

マラソン大会の成長は観光や物流にも好影響が及び、大会の情報発信や運営を通じて地域の活性化にも貢献するでしょう。

そうした流れを支援する為にも、ハートフルランナーズで取り扱っている大会をハーフマラソンやウルトラマラソンにも広げるなど、情報提供の質と量の充実を図っていきたいと考えています。

■ ■ ■ フィニッシュタイム変換システムの信頼性 ■ ■ ■

最後に、フィニッシュタイム変換システムの信頼性について、“再現性”と“整合性”という側面から考えてみましょう。

「なんだか難しそう。」

「そんなに難しい話ではないので、気軽に聞いてください。」

(1) 完璧な再現性

STAP細胞事件の経過を持ち出すまでもありませんが、“再現性”は科学の命と言っても過言ではないでしょう。

追実験において再現性が確認されればSTAP現象も歴史的な発見として認知され、科学史に新たなページが書き加えられることになります。



「検証実験では STAP 現象は再現できなかったようですね。」

「そうですね。残念な結果でした。」

マラソン大会は異なる開催地、すなわち異なるコースで開催されますし、同じコースであっても気象条件は年度会毎に異なります。

また、各大会の完走者数も世界大会のように完走者が100人未満の大会から東京マラソンのように3万人を超す大規模な大会まで存在します。出場資格や関門等の運営規定も大会毎でまちまちです。

こうしたレース条件や大会の規模、運営規定が如何様であろうとも、フェアタイムを提供することができ、フィニッシュタイム変換システムに組み込むことができます。

この完璧とも言える再現性が当該システムの科学性を担保する根拠であり、フィニッシュタイム変換システムの信頼性の裏付けとすることができます。

「簡単なことのように思うかもしれませんが、条件が全く異なる大会を同じ基準で処理するって、結構、大変なんですよ。象とねずみを同じはかりで量るようなものですからね。」

「その辺りはよく分からないけど、どんなときでも何とかしちゃう人って、やっぱスゴいのよね。」

「そうそうそう。そんな感じ。」

(2) 圧倒的な整合性

次に、フェアタイム、ワープタイムの整合性について考えてみましょう。

「整合性って？」

「簡単に言うと、“つじつまが合う”ってことです。」

先にお話ししましたが、ハートフルランナーズのWebサイトでは、基本的に各大会について直近の3大会のフェアタイムを公開しています。

前述の通り、大会数の累計では約200大会、フィニッシャーの累計では約100万人です。

したがって、フィニッシュタイムを変換する組み合わせは $200 \times 10^6 = 2 \times 10^8$ で、約2億通りあります。

また、フェアタイムやワープタイムを用いてランナー相互を比較する組み合わせは、 $10^6 \times (10^6 - 1) / 2 \approx 5 \times 10^{11}$ で、約5,000億通りです。

「5,000億ですか。」

「はい。」

「天文学的な数字ですね。」

「そうですね。私たちの太陽系がある天の川銀河の恒星の数が約2,000億で、観測可能な宇宙の範囲で少な

くとも1,700億の銀河が存在するなんて言われていますから、まさに天文学的数字ですね。」

「全く想像できません。」

「私にも想像もできませんが、こうした天文学的な組み合わせの比較において決定的な矛盾が生じておらず、整合性が保たれているという事実が、フェアタイムおよびワープタイムの信頼性の証です。」

「すごいことでしょうけど、あまりにも日常生活とはかけ離れた膨大な数字なので、ちょっとピンとこないです。」

「じゃあ、今までのやり方と比較してみましょう。」

オリンピックや世界選手権では、マラソンの代表は幾つかの代表選考大会の中から代表選手を選びます。しかし今までは、たかだか数大会の代表選考大会での選手のパフォーマンスを比較することですら、困難を極める作業でした。

かつての陸連のマラソン五輪代表選考の選考理由を検証すると、記録、順位、レース内容、それに実績といった項目が考慮されているようです。

しかし、記録、順位、レース内容に関する選考の根拠に関しては、一つ一つに多くの反例を挙げることができますし、実績の評価に関しては、選考大会の結果重視か実績重視といったところで一貫性の欠如が指摘されているところです。

つまり、再現性・整合性・定量性という観点から見て選考理由に信頼性が欠如していると言わざるを得ず、その結果、混乱が発生するのです。

「マコちゃんは若いから知らないと思いますが、高橋尚子選手の選考問題以前からマラソンのオリンピック代表選考は血で血を洗う骨肉の争いがあったのですよ。」

「そうなんですか？」

「最近フェアタイムの登場もあって比較的平穩に推移していますが、昔は本当に凄かったですよ。かつては日本のマラソンが強かったということもありますけどね。今だにしこりを残している選手や関係者も少なくないでしょうね。」

「陸連も積極的にこうした科学的データを取り入れればいいのに …」

「本当にそう思います。ずっと言い続けているんですけどね。」

「陸連の人はどう思っているんでしょうね。」

「どうでしょう。分かりません。」

「でも、オリンピックの代表選考で陸連の選考とフェアタイムやワープタイムが示唆する結果とが異なっていて、不利益を被った選手サイドが訴えを提起したとしましょう。そうすれば流れはすぐ変わります。」

「どうしてですか？」

「陸連の選考理由には幾らでも反例を挙げることができます。一方、フェアタイムやワークタイムは天文学的數字において矛盾が生じないデータです。この事実を司法がどう判断するかということです。司法も所詮、科学的データに支配される身ですからね。」

「なるほどね。陸連の人も大変ね。」

「皆さん、プライドが高いですからね。」

(3) 従来の方法論とVMS理論の違い

今まで、マラソンのレース条件とかパフォーマンスの評価は難しいということ、そしてVMSによってこうした課題を克服したことをお話しました。

ここで、少しだけ従来の方法論とVMSとの違いに触れておおきたと思います。

「それぞれ。どうしてこんなことができるようになったの？」

「それは、VMSが今までの方法論とは全くとは違うシステムだからです。」

マラソンの記録には気温や風、高低差などの様々な因子がマラソンのパフォーマンスに影響します。従来の研究では、これらの因子が記録にどのように影響するかという因果関係を踏まえて記録を評価します。

「普通はそうしますよね。これじゃダメなんですか？」

「結論を言うと、ダメなんですよ。」

まず、マラソンに影響を与える原因は無限に存在しますし、マラソンのコースは屋外の広範囲に及びます。したがって、測定項目も測定する範囲も無限大である必要があります。

「理屈的にはそうなのでしょうね。」

しかし現実には、考慮する原因因子は気温や風、高低差など僅かな項目に限定し、それらの測定も限定的な範囲で測定を行うしかありません。この段階で、処理結果に一定の不確かさが含まれることになります。

「ここまでいいですか？」

「はい。」

また、物性と違って人間が介入する現象の解明ですから、原因と結果(パフォーマンス)の因果関係は単純ではありません。

たとえば風ですが、普通、風はパフォーマンスにはマイナス要因ですが、気温が高めのときは風はプラスの効果として作用するでしょう。このように、原因因子が独立して作用するのか複合的に作用するのか判別する手段はありません。

こうした理由から、従来の方法論の枠組みによる処理ではたちどころに処理結果における不確かさが識別限界を上回るようになります。つまり、たった2つの大会の識別に必要な分解能すら実現できず、複数の大会の評価となるとたちどころにお手上げの状態になります。

「言ってること、分かりますか？」

「なんとなく、分かる気がします。」

例えば、北京五輪男子マラソンのサムエル・ワンジル選手の記録を評価しようとしても、従来の方法論では絶対に不可能だと断言できます。もし私のこの見解に対して異論がある研究者がおられたら、是非、やって頂きたい。

「従来のやり方は科学なんですか？」

「“科学”というより、“思想”でしょうね。”自然科学の分野では有効な方法論なのでこの問題にも適用できるだろう”という思想。でもその結果は、再現性もないし整合性もないものになります。」

「よく分からないけど、やり方そのものの限界ということ？」

「そうです。シンボリズムの限界なのです。」

「シンボリズム？ なにそれ？」

「表象主義(記号主義)ということですけど、この話は余りに大きくてデリケートなテーマなので、流石にここは立ち入らないことにします。」

「では、VMSではどうするのですか？」

「VMSでは、気温とか風とか高低差とかいった情報は一切、使いません。」

「え？ じゃあ、どうするんですか？」

「各大会に出場した選手の過去の記録だけを使います。」

「それは本当ですか？」

「本当です。」

「信じられません。」

「信じられないかもしれませんが、現実にWebサイトを通じて大量で精密な情報を提供していますよね。」

「そうですね。」

「それが何よりの証拠です。先ほど述べた北京五輪のワンジル選手のフェアタイムもちゃんと出してますよ。堂々と。」

「それで、どうしてVMSだと今までできなかったことができるんですか？」

「大会の結果は無限に存在する原因因子全てによる効果ですから、ランナーの過去の記録と大会の結果の解析だけでなんとかなるのです。」

「そうなんだ。」

「例えばですが、メルトダウンした福島第一原発を考えてみてください。原子炉はとても危険な状態なので誰も内部の状況を知ることは出来ませんが、圧力容器の温度制御はできてますね。つまり、原子炉内部が全く分からない状態、つまり“ブラックボックス”であっても、給水と排水の関係から制御はできるということです。」

「確かにそうですね。」

「この事例をマラソンに当てはめると、給水が出場選手の過去の記録、排水が出場選手のその大会での記録、そして原子炉が各マラソン大会のレースコンディションに相当します。つまり、各マラソン大会のレースコンディションがブラックボックスであっても、各ランナーのパフォーマンスの評価は出来るのです。」

「なるほど。」

「もちろん、入手できる情報の質と量によって処理結果の信頼性が変わってきますが、不確かさを付記することによって実用的なデータとして使えるのです。」

「それで、VMSってどんなシステムなんですか？」

「通常の統計処理のような単純な積和演算ではなく、緻密な収束演算の積み重ねで構成されています。」

「よく分かりませんが、細かい処理なんですね。」

「そうです。データ処理に特効薬なんではありません。“こうすればできますよ”というようなものではないのです。大量なデータに対して緻密な作業を正確に積み上げていただけなんです。」

「“データ処理に王道”なしですね。」

「正にその通りです。でも、システムの詳細は秘密です。“ヘッジファンドが金儲けの為に使う”なんてことになって欲しくないものですから。」

「その方がいいですね。」

「むしろ、彼らを骨抜きにするために使おうと思っています。」

「あちこち敵をつくるんですね。」

「そうかもしれませんね。でも、非科学的な“単なる思想”や“マネー”によって世の中が支配されていることに無性に怒りを覚えるんです。それと、“強いものいじめ”は持って生まれた性格でしょうね。」

「でも、やっていることは凄いのにな、どうして世間では余り知られていないのですか。」

「まあ、ある意味、大きなイノベーションですからね。それだけに各分野の研究者の抵抗も大きくなります。システムの“破壊力”を世の中が認知するには、ある程度の時間が必要ということなのでしょうね。」

■ ■ ■ おわりに ■ ■ ■

私をマラソンの研究にかりたて、孤立無援の中で10年余に亘って前例のない研究を継続できた原動力は、従来の五輪マラソン代表選考における非科学性とそれによって繰り返されてきた不条理に、マラソンをこよなく愛する市民ランナーとして我慢がならなかったからに他なりません。

現実世界への失望と反発からイスラム国になびく若者が少なくないと聞きますが、私は私なりの方法で、武力に頼らずとも不条理と闘うことができることを、フィニッシュタイム変換システムの公開に合わせて世界に訴えていきたいと思っています。

強い信念を持ち、毎日をコツコツと実績を積み上げていけば、暴力という手段に頼らなくても、たった一人でも、そして全く無名の存在であったとしても、世の中を変えていけるのではないのでしょうか。

フェア(公平・平等)、クール(冷静・反骨)、ハートフル(共存共栄)はハートフルランナーズの基本理念です。

VMSはマラソン以外でも多様な応用があります。

私は、ハートフルランナーズが掲げる上記の理念を実現するためにVMSを活用したいと考えています。



フェアタイムが新たな世界を切り拓いたように、VMSは人類が作り上げた負の遺産を一つ一つ浄化していくことができるでしょう。

こうしたビジョンを実現する上で、ランナーは力強い同志だと思っています。

なぜなら、強い意志と体力を有し、アクティビティが高く、自然をこよなく愛する存在であるため、閉塞状況にある社会を突破する可能性を秘めていると信じているからです。

ランナーの皆さん、マラソン関係者の皆さん、フィニッシュタイム変換システムに込められた思いをご理解頂き、新たな社会を創造するための共に初めの一步を踏みだしましょう。